

『旅人寒し (05/08)』

陽のさんさんとした
中を旅人は行く
空には強風が荒び
樹木は揺れに揺れている
旅人の外套は踊り
野道を歩く彼は困惑する
道の長さも陽の暖かさも
荒び吹く風の音も
彼の友とならず通り過ぎる

牡丹の大輪が匂い
紫陽花が五月の空に映る時を
旅人は行きます
冬の外套は小雨に重く
その大きなトランクも重く
人里を過ぎ森を過ぎ
四季の所々で道を歩いている
旅人は歩きを辞めず
旅人は語りをせず

『陽 (05/26)』

五月の陽はどうして
沈んでいるのでしょうか
まるで鉛のような輝き
新緑が風に揺れて
日は過ぎて行く

春がまだ抜け切っていない
夏にはまだ早い
そんな初夏を触れる日が
五月なのでしよう
だから鉛の陽なのでしよう

『唄声 (05/26)』

路地裏小路に
流れ行く
人が唄の響音に
誰かの心が透ってくる
悲しみや喜びや
命を持った心が
唄の中から聞こえてくる

人はなぜ生きるのでしょうか
人はどうして悲しむのだろうか
人はなぜ傷つくのだろうか
命を持った心が
唄を透して暗闇に溶けていく
悲しみが溶けていく
傷ついた痛みが溶けていく

路地裏小路に風が通り
人の心が泣いている
人の心が泣いている
夜風が闇夜に吹き去って
寂しい笑いに身を隠し
心の涙の響き唄
闇夜へ風が消えてい

『五月の日 (05/29)』

五月の日の思いは
どうしても晴れないのです
どうしても飛んでいかないのです

白壁造りの家が軒下の
雀の巣にも陽があたり
どんよりした中を
忙しそうに飛んでいる

五月の思いは鉛のように
心の泉の底へと
沈んで沈んで行くのです
涙に溶けることなく

午後の明かるさが
壁を光らせている
白い明るさ白い輝き
家はひっそりと佇んでいる

五月の日の思いは
どうしても晴れていかないのです
どうしても飛んで行かないのです

『家 (05/29)』

林の奥深く佇まいの家から
煙が立ち上っている

庭先で何かを燃やしているのでしょう
新緑の林の中へ

広がっては消えていきます
人の気配もない家ですの

どなた様が焼いているのでしょうか
それが想い出であるように

林の中は煙の海なのです
どなた様が焼けているのでしょうか

それが思い出であるかのように
林の中は煙のカーテンなのです

崩れ落ちそうな瓦屋がね

朽ちた土壁……な家ですの

林の奥深くでは似合いの家のように

林の中に現れる煙の海は

林の中に来る煙のカーテンは

おとぎの国への入り口

夢が現れて風にゆっくりと消えて
また現れて消えて

微風に揺れている新緑の木立が

目の前の現実と覚めるのです

林の奥の佇まいの家から

また煙が立ち上りました

人の香具が煙となつて消えていき

人の思い出が大地へと戻されています

あああの朽ちた家ですか

満州からの引き上げ家族がね

支給地と米一俵で開墾生活がね

確か父親は酒乱に母親は鬱病に

二人の子供が命を絶つた家ですよ

他に身よりなくこの広大な雑木林を
行政はまだ処分しかねているのです

『深夜 (05/30)』

昼間の音が消えた暗闇の中で

踏みきりの警告灯が点滅している

樹の新緑の茂みもやみに隠され

眠っているものであろうか

深夜の二時
身体の硬直する痛みに耐えかねて
私は眠りも許されず窓の外を眺めている

動きが鈍くなった腕を
動かすのが難儀の両脚で
目に涙を出してベッドから起きだし
薬を飲みしばらく窓辺で闇夜をみている

自分の身体がいとおしいのです
心が身体に謝るのです
死ぬまで我慢してくれと

音を消した深閑は
やみにその形も色も隠し
再び来る明日に憩っている
踏み切りの警告灯だけが点滅している

End all 1996/05

『涙 (06/08)』

ほほを伝わる
私の涙よ
生きていく切なさに
流れ出でる涙よ
なまじ昨日が記憶に有り
明日が思いに有るからか
生きに身体が震えている

昨日も消えて今日に無く
明日をも消して有るなら
生きの辛さなど
感じはしないだろうが
生きていく切なさに
私の涙が
頬を流れ落ちる

『想い (06/09)』

人と生まれて
人と生きて
息絶える
なぜ悲しんだかも

なぜ涙を流したかも
知ることもなく

なぜ私は苦しむのだろう
なぜ私は悩むのだろう
なぜ私は寂しいのだろう

なぜ私の心は愁いるのだろう
なぜ私の心は痛むのだろう
なぜ私の心は重いのだろう

人と生まれて
人と生きて
息絶える
なぜ悲しんだかも
なぜ涙を流したかも
知ることもなく

『夜 (06/09)』

山奥の夜は沈黙が海
不夜城の夜は人と明かりの海

人は黄金を求めて
不夜城へと自分の生きを削る
都会の海へと船を出す

海はいつも穏やかではなく
海はいつも嵐ではなく
一面に黄金の風を見せたり
陽の出に染まるうねりを見せたり
樹海の港にそっと船を休める

宝物であつた愛はいつ日か失い
不夜城が砂漠の海と人は知る
姿を見せた都会の砂漠は
人の熱でもう一個の太陽のごとく
ギラギラと燃えている

不夜城の夜は今日もまた
都会の海へと一隻の船が出航した
黄金の希望を胸に描いて
山奥の夜は森閑が海
沈黙の径をじっと照らしてる

『雲と陽 (06/22)』

雨雲が黙々と垂れ下がり
 家の白壁は午後の陽が明るく
 照り返っている
 鬱蒼とした葉が左右にしなり
 いつしか六月は初夏を
 思わせる日々と移り変わっていた

森の径に歩く
 恋人たちは美しい
 笑いの響きも
 語らいの響きも
 清々しく
 木立を通っていく

雨の六月は
 陽の輝きで終わるのですね

雨が青空を覆い隠し
 水に溶けた生きの様々は
 地上を彷徨い
 木立を彷徨い吹かれ

いつか虹となって
 天上へと渡って行くのでしょう

雨雲が黙々と垂れ下がり
 家の白壁が午後の陽を受けて
 眩しく照り返っている
 鬱蒼とした葉が揺れ動き
 いつしか六月は初夏を
 思わせる日々と移り変わっている

『苦しみ (06/28)』

人はどうして
 生きてるのであるうか
 人はどうして
 悲しむのであるうか
 人はどうして
 泣くのであるうか
 人はどうして
 苦しむのだらうか
 人はどうして
 死んでしまうのであるうか

陽は沈み
 月が昇り

陽が昇り
 月が沈む

雨の日もあれば
 天気の日もある

春は間違はなく来るし
 冬も間違はなく巡る

陽は沈み
 月が照り

陽が照り
 月が沈む

雪の日もあれば

花吹雪の日もある

夏は間違ひなく来るし
秋も約束をたがいない

秋が来て冬になる

愛するがゆえに
とわに生き続ける
愛するが故に
とわに生き続ける
生命が魂のおきてに

End all 1996/06

人はどうして
生きなければならぬのだろう
人はどうして
耐えなければならぬのだろう
人はどうして
涙を流すのだろうか
人はどうして
痛みを感じるのだろうか
人はどうして
最後には死んでしまうのだろうか

いつだって
陽は沈み月が昇り
月が沈み陽が昇る

いつだって
春が来て夏になって